

# 遠野の奇聞

泉鏡花

青空文庫



近ごろ近ごろ、おもしろき書を読みたり。柳田国男氏の著、遠野物語なり。再読三読、なお飽くことを知らず。この書は、陸中国上かみへいごおり閉伊郡に遠野郷とて、山深き幽僻地ゆうへきちの、伝説異聞怪談を、土地の人の談話したるを、氏が筆にて活かし描けるなり。あえて活かし描けるものと言う。しからざれば、妖怪變化ようかいへんげ豈得てかくのごとく活躍せんや。

この書、はじめをその地勢に起し、神の始はじめ、里の神、家の神等より、天狗てんぐ、山男、山女、塚と森、魂の行方、まぼろし、雪女。河童かっぱ、猿、狼、熊、狐たぐいの類より、昔々の歌謡に至るまで、話題すべてつくも一百十九。附馬牛つくもうしの山男、閉伊川ひいの淵ふちの河童、恐しき息を

吐き、怪しき水搔みずかきの音を立てて、紙上を抜け出で、眼前あらかわに顕る。近来の快心事、類少なき奇観なり。

昔より言い伝えて、随筆雜記おもかげとどに佛を留め、やがてこの昭代に形を消さんとしたる山男も、またために生命あるものとなりて、峰づたいに日光辺まで、のさのさと出いで来きたらむとする概あり。

古来有名なる、岩代いわしろのくに国会津こくえつの朱の盤ばん、かの老媪茶話らうおんさわに、

奥州会津諏訪すわの宮に朱の盤ばんという恐しき化物ありける。

あるひぐれ

或暮年あるひぐれの頃廿五六なる若侍にん一人、諏訪の前を通りけ

るに常々化物あるよし聞及び、心すごく思いけるおり、

又廿五六なる若侍きた来る。好き連よつれと思ひ伴いて道すがら語

りけるは、ここには朱の盤とて隠れなき化物あるよし、

其方そなたも聞及び給うかと尋ぬれば、後うしろより来きたる若侍、その化物はかよふの者かと、俄にわかおもてに面替り眼は皿のごとくにて額つのに角つき、顔は朱のごとく、頭かしらの髪は針のごとく、口、耳の脇まで切れ齒たたきしける……

というもの、知己ちぎを当代に得たりと言うべし。

さて本文の九に記せる、

菊地弥之助やのすけと云う老人は若き頃駄賃を業とせり。笛の名人にて、夜通しに馬を追いて行く時などは、よく笛を吹きながら行きたり。ある薄月夜にあまたの仲間の者と共に浜へ越ゆる境さかいぎとうげ木峠おおやちを行くとて、また笛を取とり出いだして吹きすすみつつ、大谷地おおやち（ヤチはアイヌ語にて湿地の

義なり内地に多くある地名なりまたヤツともヤトともヤとも云うと註あり」と云う所の上を過ぎたり。大谷地は深き谷にて白樺しらかばの林しげく、其下そのは葦あしなど生じ湿りたる沢なり。此時このとき谷の底より何者か高き声にて面白いぞ——と呼よばわる者あり。一同ことごと悉く色を失い遁にげ走りたりと云えり。

この声のみの変化へんげは、大入道よりなお凄すこく、即ち形なくしてかえつて形あるがごとき心地せらる。文章も二三さんしやう誦すべく、高き声にて、面白いぞ——は、遠野の声を東都に聞いて、転うたたね寝の夢を驚かさる。

白望しろみの山続きに離はなれもり森と云う所あり。その小字こあざに長者

屋敷と云うは、全く無人の境なり。茲に行きて炭を焼く者ありき。或夜その小屋の垂菰をかかげて、内を覗う者を見たり。髪を長く二つに分けて垂れたる女なり。このあたりにても深夜に女の叫声を聞くことは、珍しからず。

佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を採りに行きて宿りし夜、谷を隔てたるあなたの大なる森林の前を横ぎりて女の走り行くを見たり。中空を走る様に思われたり。待てちやアと二声ばかり呼ばりたるを聞けりとぞ。

修羅の巷ちまたを行くものの、魔界の姿見るがごとし。この種の事は自分実地に出あいて、見も聞きもしたる人他国にも間々あらんと

思う。われ等もしばしば伝え聞けり。これと事柄は違えども、神田の火車も十里を隔てて幻にその光景を想う時は、おどろおどろしき氣勢けはいの中に、ふと女の叫ぶ声す。両国橋の落ちたる話も、ま  
ず聞いて耳に響くはあわれなる女の声の——人雪ひとなだれ顔を打つて大  
川の橋はし杭くいを落ち行く状さまを思うより前に——何となく今も遥はるかに  
本所かたの方へ末ひを曳いて消え行く心地す。何等か隱約うちの中に脈を通  
じて、別の世界に相通ずるものあるがごとくならずや。夜半よわの寝  
覚うつつに、あるいは現うつつに、遠吠とおほえの犬の声もフト途絶ゆる時、都大路  
の空行くごとき、遙かなる女の、ものとも知らず叫ぶ声を聞く事  
あるように思うはいかに。

またこの物語を読み感ずる処は、事の奇と、ものの妖ようなるの



みにあらず。その土地の光景、風俗、草木の色などを不言の間に聞き得る事なり。白望に茸を採りに行きて宿りし夜とあるにつけて、中空の氣勢けはいも思われ、茸狩る人の姿もしの偲しのばる。

大体につきてこれを思うに、人界に触れたる山魅さんみじんよう人妖異類じんよういれいのあまた、形を変じ趣をこそかえ変たれ、あえて三国伝来して人を誑ばかしたる類たぐいとは言わず。我国に雲のごとく湧わき出いでたる、言いつたえ書きつたえられたる物語にはほぼ同じきもの少からず。山男に石を食くわす。河童の手を奪える。それらなり。この二種の物語のごときは、川ありて、門かど小さく、山ありて、軒の寂あたりしき辺あたりには、到る処として聞かざるなき事、あたかも幽霊あめが飴あめを買いて墓の中に嬰え児いじはぐくを哺ほみたる物語の、音羽にも四ツ谷にも芝にも深川にもあるが

ごとし。かく言うは、あえて氏が取材を難ずるにあらず。その出  
 処に迷うなり。ひそかに思うに、著者のいわゆる近代の御伽百物  
 語の徒輩にあらずや。果してしからば、我が可懐なつかしき明神の山の  
 木菟みみずくのごとく、その耳を光らし、その眼を丸くして、本朝の鬼  
 のために、形を蔽おほう影の霧を払って鳴かざるべからず。

この類たぐいなおあまたあり。しかれども三三に、

……(前略)……曾かつて茸を採りに入りし者、白望の山奥  
 にて金の桶おけと金の杓しゃくとを見たり、持ち帰らんとするに極  
 めて重く、鎌にて片端を削り取らんとしたれどそれもか  
 なわず、また来んと思いて樹の皮を白くし葉しおりとしたりし  
 が、次の日人々と共に行き、これを求めたれど終ついにその

木のありかをも見出し得ずしてやみたり。

というもの。三州奇談に、人あり、加賀の医王山いおうせんに分入りて、

黄金の山葵わさびを拾いたりというに類す。類すといえども、かくのご

ときは何となく金玉の響ひびきあるものなり。あえて穿鑿せんさくをなすには

あらず、一部の妄誕もうたんのために異霊いれいを傷きずけんことを恐るればなり。

また、事の疑うべきなしといえども、その怪の、ひとり風の冷

き、人の暗き、遠野郷にのみ権威ありて、その威の都会に及び難

きものあるもまた妙なり。山男に生捕られて、ついにその児こを孕はら

むものあり、昏迷こんめいして里に出いでずと云う。かくのごときは根子ねこ

立だちの姉あねのみ。その面赤おもてしといえども、その力大なりといえども、

山男にて手を加えんとせんか、女が江戸えど児こなら撲倒はりたおす、……御

一笑あれ、国男の君。

物語の著者も知らるるごとく、山男の話は諸国到る処にあり。

雑書にも多く記したれど、この書に選ばれたるもののごとく、まさしく動き出づらん趣あるはほとんどなし。大抵は萱かやを分けて、ざわざわざわと出で来り、樵夫きこりが驚いて逃げ帰るくらいのもなり。中には握飯を貰いて、ニタニタと打喜び、材木を負うて麓ふもと近くまで運び出すなどいうがあり。だらしのなき脊高のっほにあらずや。

そのかわり、遠野の里の彼のごとく、婦おんなにこだわるものは余り多からず。折角の巨人、いたずらに、だだあ、がんまの娘を狙ねろうて、鼻の下の長きことその脚のごとくならんとす。早地峰はやちねの高仙人、願ねがわくは木の葉この禪こんを緊一番せよ。

さりながらかかる太平楽を並ぶるも、山の手ながら東京に棲すむ  
おかげなり。

奥州……花巻より十余里の路上には、立場たてば三ヶ所あり。

その他はただ青き山と原野なり。人煙の稀少まれなること北  
海道石狩の平野よりも甚し。

と言われたる、遠野郷に、もし旅せんには、そこにありてなおこ  
の言ことばをなし得んか。この臆おくびよう病びょうもの覚おぼつか束つかなきなり。北国にて  
も加賀越中は怪談多く、山国ゆえ、中にも天狗の話は枚挙するに  
違いとまあらねど、何ゆえか山男につきて余り語らず、あるいは皆無に  
はあらずやと思う。ただ越前には間々あり。

近ごろある人に聞く、福井より三里山やまごえ越こえにて、杉谷という村

は、山もて囲まれたる湿地にて、菅すげの産地なり。この村の何某なにがし、秋の末つ方、夕暮の事なるが、落葉を拾いに裏山に上り、岨道そばみちを俯向うつむいて搔込かきこみいると、フト目の前に太く大なる脚おおい、向脛むこうずねのあたりスクスクと毛の生えたるが、ぬいとあり。我にもあらず崖を一なだれにころげ落ちて、我家の背戸に倒れ込む。そこにて吻ほっと呼吸いきして、さるにても何にかあらんとわずかに頭こうべを擡もたぐれば、今見し処に偉大なる男の面赤つらきが、仁王立ちに立たちはだかりて、此こ方なたを瞰みお下ろし、はたと睨にらむ。何某はそのまま氣を失えりというものこれなり。

毛だらけの脚にて思出す。以前読みし何とかいう書なりし。一人の旅商たびあきゆうど人、中国辺の山道にさしかかりて、草刈りの女に逢

う。その女、容目みめことに美しかりければ、不作法に戯れよりて、手をとりにとも上る。途中にて、その女、草鞋わらじ解けたり。手をはなしたまえ、結ばんという。男おはむきに深切だてして、結びやるとて、居屈いかがみしに、憚はばかりさまやの、とて衝つと裳もすそを掲げたるを見れば、太ふくらはぎ脛すねはなお雪のごときに、向う脛すね、ずいと伸びて、針を植えたるごとき毛むくじやらとなつて、太き筋くちなわ、蛇のごとくに蜿うねる。これに一ひとたま堪りもなく氣絶せり。猿へんげの変化ならんとありしと覚ゆ。山男の類なりや。

またこれも何の書なりしや忘れたり。疾はやき流れの谿たにがわ河を隔てて、大いなる巖いわあな洞あり。水の瀬激しければ、此方こなたの岸より渡りゆくもの絶えてなし。一日里あるひのもの通りがかりに、その巖穴の中

に、色白く姿乱れたる女一人立てり。怪しと思いて立ち帰り人に語る。驚破すわとて、さそいつれ行きて見るに、女同じ処たにあり。容易やすく渉わたるべきにあらざれば、ただ指ゆびさして打騒ぐ。かかる事二日三日になりぬ。余り訝いぶかしければ、遙はるかに下流より遠廻りにその巖いわあ洞なに到りて見れば、女、美しき棲つまも地につかず、宙に下る。黒髪を逆さかさに取りて、巖いわの天井にひたとついたり。扶たすけ下ろすに、髪を解けば、ねばねばとして膠にかわらしきが着きたりという。もつともその女昏迷こんめいして前後を知らずとあり。

何の怪のなす処なるやを知らず。可厭いやらしく凄すごく、不思議なる心持いまもするが、あるいは山男があま干ほしにして貯たくわえたるものならんも知れず、怪けしからぬ事かな。いやいや、余り山男の風説うわさを



すると、天井から毛だらけなのをぶら下げずとも計り難し。この例本所の脚洗い屋敷にあり。東京なりとて油断はならず。また、恐しきは、

猿の経ふつたち立、お犬の経ふつたち立は恐しきものなり。お犬とは狼のことなり。山口の村に近き二ツ石山は岩山なり、ある雨の日、小学校より帰る子どもこの山を見るに、処々の岩の上にお犬うずくまりてあり。やがて首を下より押上ぐるようにしてかわるがわる吠ほえたり。正面より見れば生れ立ての馬の子ほどに見ゆ、後うしろから見れば存外小さしと云えり。お犬のうなる声ほど物ものすご凄く恐しきものなし。

實げにこそ恐しきはお犬の経立ちなるかな。われら、経立なる言  
 葉の何の意なるやを解せずといえども、その音の響ひびき、言知らず、  
 もの凄すさまじ。多分はここに言える、首こうべを下より押あしあぐ上るようにし  
 て吠ゆる時の事ならん。雨の日とあり、岩山の岩の上とあり。学  
 校がえりの子どもが見たりとあるにて、目のあたりお犬の経立ち  
 に逢う心地す。荒涼たる僻へきそん村の風情も文字の外にあらわれたり。  
 岩のとげとげしきも見ゆ。雨も降るごとし。小兒こどももびしよびしよ  
 と寂さみしく通る。天地この時、ただ黒雲の下に経立ふつたつ幾多馬の子ほ  
 どのお犬あり。一つずつかわるがわる吠ゆる声、可怪あやしき鐘の音ね  
 のごとく響きて、威霊いわん方なし。

近頃とも言わず、狼は、木曾街道にもその権威を失いぬ。われ

ら幼き時さえ、隣のおばさん物語りて——片山里にひとり寂しく  
 棲すむ媪おうなあり。屋根傾き、柱朽ちたるに、細々と苧おをうみいる。狼  
 のしのしと出でてうかがうに、老いさらばいたるものなれば、金き  
 魚んぎよぶ麩ぶのようにて欲ほしくもあらねど、吠えても嗅かいでみても恐れぬ  
 が癩しやくに障りて、毎夜のごとく小屋をまわりて怯おびかす。時雨しとし  
 とと降りける夜よ、また出掛けて、ううと唸うなつて牙を剥き、眼を光  
 らす。媪おしずかに顧みて、

やれ、虎狼より漏るが恐しや。

と眩つぶきぬ。雨は柿の実の落つるがごとく、天井なき屋根を漏る  
 なりけり。狼うなだれて去れり、となり。

世の中、米は高価にて、お犬も人の恐れざりしか。

明治四十三年（一九一〇）九月・十一月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十八卷」岩波書店

1942（昭和17）年11月30日発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 遠野の奇聞

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>